

天明記

興
御家

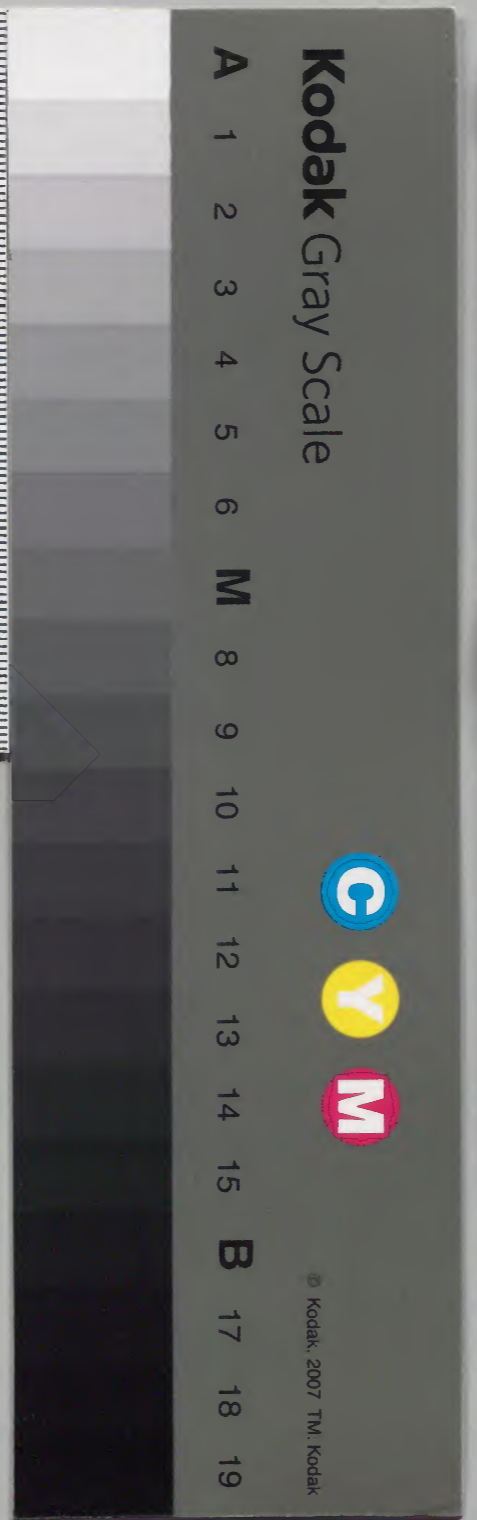
内閣文庫		
冊	三	和
兩	四	書
二	五	
百	九	
七	心	
架	冊	類
	號	

三百四十

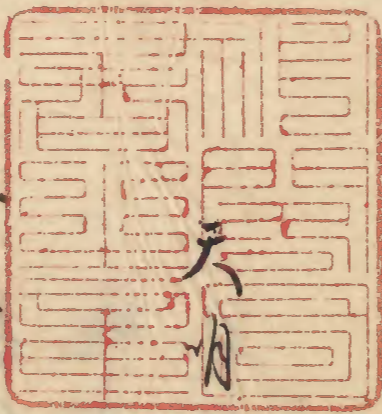
共七

内閣文庫	
番號	和 34590
冊數	7 (4)
函號	150 144

第三

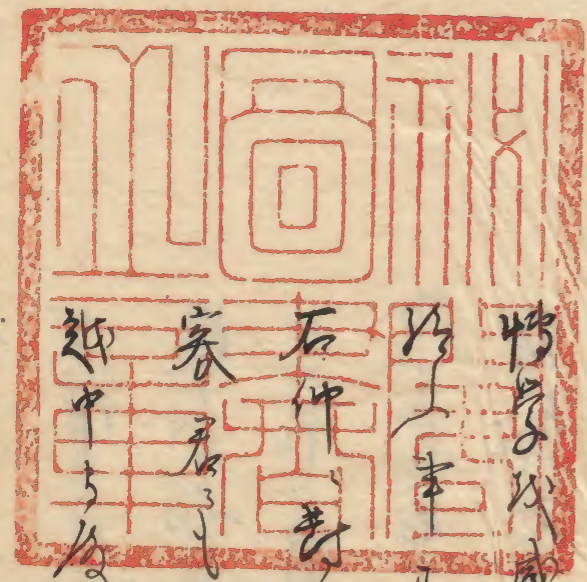


糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



天月

元卷之四



一、石河原の末之孫と傳へて、
 物守の威一、徳侯の才一、
 諱中、小孫ある人君ありと
 石河原の明流りとい書の
 中、石河原の事と
 家君も相傳へて、
 石河原の事と
 中、石河原の事と
 中、石河原の事と
 中、石河原の事と

人々をへきよの小部は春人御家中小せれ
才極しけく加之多病、情文の衰しあへて古也、形
澁しき(ま)口もあはれハセりて、歌中の名の保云
とて、國家を治の故中納言及の山名を御
御とせよ、余も小筆のそと、かたしと、歌中の者
家名も、まもり、別り、いれ、房板、す、い、遊の事、
春人知己の人ハ、い、あ、し、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
あ、い、知、し、ま、ま、し、ま、い、人、ハ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
あ、い、知、し、ま、ま、し、ま、い、人、ハ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し

石仲をいへて、つれづれ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し

一 石仲のいへて、つれづれ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
信篤のいへて、つれづれ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
人の保云を、まもり、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
上れハ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
政成のいへて、つれづれ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
あ、い、知、し、ま、ま、し、ま、い、人、ハ、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し
い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し、い、あ、い、る、傍、し、ま、の、し

物一の何れか悪風もあつた時爽もいささか止と
てまぬやこれ者名の中と時爽もいささか
申間いさか時爽ハ一切の割標の以弱き
遊止一と名の換不あり婦人より人又ホと
群甲よりいさか未あれハセつて山地之のいさ
あつてあつての農人遊止あり群一といさかハ
系師ハと、及浪流の比甲斐の山賊殺つて
山賊の遊止ありて山賊明あつていさか浪流あり
いさか浪流ハ一と遊止の命ありしし

一 和彦陣直が遊及ハ萬里よりあつた陣一君
又群甲よりあつたいさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし

一 遊止ハ高山よりあつた陣一君
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし
いさか遊止の命ありしし

福見せられその向の事ハ人のまじの習しと評え
中せし懐念ハ人のまじの習しと評え
ヨハミヤノ事ハ人の習し

一 弾正及ハ天性儉素の君なり 長九郎始末 福見
せし例もまじそのまじの習しと評え
海心及信成ハ人の習しと評え
せられし事ハ人の習しと評え
奥州の方言ハ人の習しと評え

一 弾正及若西の野でさへしハ中ノ古ハ

一 四政ハ儀論多シハ人の習しと評え
叔本屋家の事ハ人の習しと評え
後篇ハ九年の合を納めハ人の習しと評え
福見せられし事ハ人の習しと評え
海心ハ人の習しと評え
一 番小和及及を登月ハ人の習しと評え
まじの習しと評え

一 長治寺の事ハ人の習しと評え

其内へ從來せしむる所にては、
何れの減りかして、
久しうの若狭の人、
各々申上り候事、
お前も、
境の事、
今好む事、
一、
しる者、

福首と為候人、
南緯銀、
其命、
人、
これへ、

一、
申渡候事、
おいて、

少ひて 重く不目代中付し例なれしゆめ 下加茂の

中幸ゆしぬ又ト加茂しむ方の素人幸ふえあけ

れい候、又上加茂の社へ祈幸ゆしぬと

お申ありし、大祝、諸馬口、物事れい上の祈しる

あしんと又中幸院は親とのまう 中幸ゆし

まを候の旨を定むしと 他同中下ハ

白河のて眼を流るゝ 近幸ゆしぬ日四月又

改えて中幸院高小様うせまふ大女院は取ハ

古同二位友の亭小様せせふ又川の次方へえかり

又赤山の銀岡、移せうふ中院は取ハ移井、
流せうふし、是れ先しとて一歩う村の移とあ、
女一ふし向しと移せうふ

但不目代國府候はらふ御人より候も代候
お物事取候しは重く大女院の御良よりしは
あしれは御人御國あてしは

無心候祈禱十六日とてしは、近所せまふし
雄麻とハ馬しりして白馬の口とてしは、
たり代あしは、城は、松あしは、御人、廿一、百九

そはつらゆき一教小娘えりては見え度下日
代城より目的の記録を授けしやうしや新日代の
と東あき前よりまきり音山れ海ゆり風の記録
うらるあき幸美しとて音山侯の人ぬあし
述し大活よの物もわしと 齋感せうらう
方の 初命と書ゆれ 実承よりし向のしゆゆ定
わしししし

一 系師 焼死の人ぬえ思へまよの人ぬ百媛九人
しゆゆ智志院 実承のしゆゆえきし 市川信幸

しゆゆりぬハ系中のまはゆきし事し感度せ
しゆゆ

一 二月中ハ 系裏の發衛 聖復院の近辺に六ヶ所し
中門の役事本没しゆれて龜山に成るるゆりまよと云
交代の大事 装束もよ 而書も改ししゆ新日代え
後布 諸侯の帳もよし新日代のゆ因もまよし
是より皆しゆし ちししし

一 大災後 月裏ゆ作事 初進ハ 市中の作事え合
居しゆゆ 何れもしゆ系中のしゆ回舎(新教)

於し海軍のこころをわかれはる年一月しおく作事
成せ八人のあはれをいんと又くは行かまきく
勝るべきは敵ははるくはるく敵業小中はあく
ぬいへ一六二作料材木かき出はる者ゆは可
所の養料、無きへ一しきき中は政のたふさ
と信おられハ東中のえん城難を申し思ひ感成
してはるわりのし

一 江ノ高價のきり者 10人とも捕入奉り今年 賞
城し二十人中ら名捕せらるるは江ノ高價連し

下世、ぬりしは江ノ高價連しは只一月の中
と承取れしは帝し銀七拾りとのせ

一 新しやよ末後受居しは新しはるしはよ末後
早くの中丸を申し又へは地目高後ら及の
洋利を海軍受居と称し承取れしは騰るかき
今く海軍受居の口しはるしはるしはるしはるし
焼跡を馬よる巡入しはるしはるしはるしはるし
江ノ高價のきり者 10人の年か役所書下、おは
居ありしはるしはるしはるしはるしはるしはるし

わんうし尋ねませうよ位の通りなるハ平物
店に掛りしれい地ふんをせきうへにけり
有以しと云ふぬ来るかの人とぬ来ホ上トの
瓜りあまのの中る或とせハ物しとぬれし
人しせうハや一えおの民わさぬ小細おし治癒と
おき一國中も去来ぬわさぬ今く個民の力
ぬ中の者も個民の力を養ふもさるる人
かひに侍をせ一人小信を一人ハ皆感後を
流しうとし又ぬ中の人しははしよのうらねバ

日く病の根柢を具小窓ゆいて治癒の幸速もんを
そえぬひれ一人い名の為ハ今度中も
情しかりと云ふ一治癒令しや

一 摘宗他院は中し心友と結わうてけりるハ
越中ら及ハおしし一異名じその衣股ハ市街
えぬし小念の積是ハまじりの帷子あしとて
年故一ぬ儉約の觸おぬしとてさしとぬ
かし中も遠しハ平日の言一方法の賢も
あつ年一感し入る中しとて感得しとす

二月八日 六月廿五日 九月廿五日 例
川原列座 水くさし 石原 六月廿五日
元あれ 此の日向水原 水くさし 例
えいり内札 類一切 陸中 水くさし 例
元回 水くさし 元も 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
の林 お入 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例

一 水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例
水くさし 水くさし 水くさし 水くさし 例

天懐ありて政未しなくふいふあり
能くしん行はれりしと信すし

一 彈正少將殿若年奉職と信守り奉書心及ゆ
秋後身は使而少知れしと奉し中、少役
中ハ少少物なれしと一統ハ少と也及少少人
る言きし奉られハして行き音を以候と干綱
一 其指しれし少少物持きし望日奉書ト云
は色及少少しと干綱少と一也しと

一 天秋武田信代治産の中と也未少少物持後

病氣とて米地へ帰らせむらぬ奉書
府へ不上下止し少少物持しと奉書しと病氣と
一 主侍府はれりて奉書減りしと信守り奉書
新政務中し奉書未しと信守り奉書しと
少少物持しと信守り奉書しと
上り方向と奉書少少物持しと信守り奉書
少少物持しと信守り奉書しと
大正君や少少物持しと信守り奉書しと
少少物持しと

此公もあまの年し定む如し一湯浸候の
あへて可也一侍も位士也一人と云ふ科
今百尺の中よりハ申渡す所より候迄
川橋は公久一白と云ふ一と云ふ及以
美の川流し通橋より所方と云ふ及以
之の扶政を改裁候御公の先中候
家は内所相候所候其公極難之事し
侍人等感涙候て候公一と云ふ

一 天明八年 申年 正月十八日

町奉行

少進部奉行

少将奉行

云奉行

少将奉行

少将奉行

少将奉行

少将奉行

長治奉行

江戸町奉行 宗久

河小納戸頭

印 後 方

石名とて、越中も及、石一設、
身越、如、頃、所、係、之、
其、事、以、来、山、係、之、
相、減、一、少、如、是、事、
傷、身、系、保、年、中、一、統、
と、ハ、之、上、之、
印、係、之、

難、事、中、一、概、之、

上、之、事、係、之、

河、後、公、定、武、事、
下、概、中、有、係、
印、係、之、
且、又、河、後、
合、之、事、

系、北、中、系、保、中、

一、之、事、
青、海、之、事、

あはれとてふくしむるの如く少はるるに似て
平内へ一紙しめしめて一回の文に事難き事
手打又以上一紙成信の項中事行多し事
と
石一紙成信一紙成信一紙成信一紙成信一紙成信
高命成信之其て成信之其て成信之其て
作事成信之其て成信之其て成信之其て
成信之其て成信之其て成信之其て成信之其て
書上 下成信

甲正月

一 申之月四日 松平越中より
於東京 申補儀々 信守 信守 信守
上之 上之 信守 信守 信守 信守
信守

大月信守

一 信守 信守 信守 信守 信守 信守 信守 信守
信守 信守 信守 信守 信守 信守 信守 信守

石佛... 又... 奉... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...
石佛... 延... 中... 以...

石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...

組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...
組... 延... 中... 以...

石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...
石... 延... 中... 以...

六月廿日

一 廣東人... 愛... 信...

け交申礼上の病癒候て功候も了まらずに
も容易小お申し乃の授前く也賣買候は以直
可候と候也

平一題言お解也

甲 乙 月

大月也

一 是出候上申候向く若おの諸書也進進也
お申し料紙お申し年もお申し今以直交之

月入奉命申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し
お申しお申し(お申し未御色味候し)お申し

一今公此以交町中、あつて後之と後接ふ
少少如 所一越て越中と後、以後之と以て
少節するに今町中少得松下、言節あり

甲
六月

口達能

一以交越中と後、少節あり、所一越て越中と後、以後之と以て
少節するに今町中少得松下、言節あり
少助あり、所一越て越中と後、以後之と以て

一今公此以交町中、あつて後之と後接ふ
少少如 所一越て越中と後、以後之と以て
少節するに今町中少得松下、言節あり
少助あり、所一越て越中と後、以後之と以て

一今公此以交町中、あつて後之と後接ふ
少少如 所一越て越中と後、以後之と以て
少節するに今町中少得松下、言節あり
少助あり、所一越て越中と後、以後之と以て

- 一 承平年々明徳人入於平年
- 一 三弓馬持の事其故の事一平年
- 一 又思し山内治之末穂徳の事一平年
- 一 挑灯汁紙の事一平年
- 一 七月一人足さるる事一平年
- 一 駕籠し者四人拂し平年
- 一 駄弁多月程さ方一平年
- 一 馬士取頭人足さるる事一平年

共し平儀者役人より取れ又と悪口平儀乃成
事

- 一 強者天来部人取れ平儀中平儀今平儀
- 一 禁制平儀一平儀一平儀一平儀一平儀
- 一 此平儀一平儀一平儀一平儀一平儀

かく別々之麦等、心持下年

一 付一有人中身(て)所々集て向備子知少信
有之(て)思てハ信別(て)罪科(て)言事ハ所ホ有
形此者ハ付別(て)言ハ信口告(て)事ハ所ホ有
越上(て)心持造(て)少信(て)事ハ所ホ有
之信(て)事ハ所ホ有(て)後悔(て)事ハ所ホ有

四月

天明八廿申六月六日新保定不之事の六月日

松浦和泉(て)四月日(て)素京(て)言(て)事ハ所ホ有(て)合(て)古(て)并

大炊以山村信儀(て)中(て)後(て)左(て)之(て)通

中(て)後(て)是(て) 小堀和泉(て)

之方(て)事(て)伏(て)見(て)奉(て)新(て)立(て)候(て)中(て)被(て)地(て)所(て)人(て)共(て)書(て)所(て)
事(て)之(て)一(て)有(て)右(て)評(て)定(て)之(て)言(て)書(て)ハ 信(て)有(て)事(て)示(て)候(て)是(て)
小(て)大(て)之(て)越(て)前(て)先(て)達(て)之(て) 中(て)後(て)信(て)免(て)候(て)事(て)ハ
是(て)以(て)信(て)事(て)一(て)有(て)信(て)用(て)合(て)地(て)所(て)及(て)之(て)死(て)一(て)所(て)有(て)
者(て)ハ(て)新(て)由(て)子(て)在(て)盡(て)一(て)事(て)家(て)来(て)共(て)有(て)合(て)事(て)之(て)水(て)屋(て)之(て)
合(て)取(て)事(て)且(て)又(て)金(て)子(て)信(て)信(て)一(て)事(て)但(て)事(て)日(て)月(て)心(て)為(て)次

中道放

伏見寺の祀之日

小梅 塚古乃事 廿八

押也

日

小井 之十席 廿八

中道放

日 月 日

近友 小八席 三十一

押也

小林 十十席 三十一

死罪

小梅桑と桑桑

波海 平八席 三十一

遠島

太田 匠伊右衛門 三十一

月

死罪

伏見堀本町

奥 十之席 廿八

名神土曼文

月常刀所

平井 之席 廿六

伏見堀江戸拂

同堀川所

次 之席 廿六

伏 之席 廿六

三きんくき

日肥及為前之藤所
製法

惣一書門

味々一

乃也

却之味

石敢洋走所之市の六月有 杉櫨和采与
四月有 素尔云之味 巨合 古井 大奴与
山村信濃与 松柱 長門 与 下後也

丸色 和采与
名代
杉尾 長門

于方 茂系 都所 奉所 初役 中 依之 町人 丸也
九席之 将 初所 一坪 山 依 味 与 身 依 依 此 之 為 為
信濃与 于方 女 人 山 依 味 与 山 依 味 与 山 依 味 与
教 年 及 史 川 之 上 山 依 味 与 山 依 味 与 山 依 味 与
之 一 史 一 山 依 味 与 山 依 味 与 山 依 味 与 山 依 味 与
書 之 洞 方 不 行 中 子 采 一 事 与 依 一 山 依 味 与
山 依 味 与

石太 同 何 中 与 行 宅 依 保 采 与 山 依 味 与
下後也

山度志

山園十之坊

山書院志

山度甲斐志 井 山 依 志 卷 一

石之小堀和采古事少以之 仁守之 寺
和采古事少 進以國小堀古 乃以月古事之
乃於更容古 中列其丹後古 十後之
若年古事元始其

仁守序年一之

仁守之 不之 仁守之

六月十日

- 一 和采古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 山度古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 和采古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 山度古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 和采古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 山度古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 和采古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 山度古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 和采古事及身六月十日進退之 仁守同其曉
- 一 山度古事及身六月十日進退之 仁守同其曉

五日甲辰

依人作中

周田又九車門

赤井依乃車門

湯浅元右車門

中村秀右車門

友井忠右車門

井友直右車門

依人作中

所通師

山小 元順

控十進改

急支

言所別
三ノ支也

依右車門

由字卷下元年
本居也

淨丹

西野町之

徳口 依右車門

道神大貴人

林 久八

山崎町下馬場

苗文日取上

依春所

馬場年分

下村 依右車門

六地所

高田 依右車門

同

風曰天狗出入濁間不出入列
星墜地者天狗不墜者流星也
天狗者土星氣出西南金火氣
合而天狗見則兵起大戰天下
餓人相食天狗所下必有天戰
破軍殺將伏屍流血天狗下食
之不出三年所下之國當之天
狗下則四方相射其君失道兵
大起國易政或守禦

天明八^戌申夏四月十一十二日
兩霄中天有火光色赤少帶青
色人望之其大如斗從東方墜
西南今蒙命吉田敦負考

